

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第十六回）

あら っ

「荒 津」

博多湾は福岡県北西部に面した湾で朝鮮半島に近いという地理的

要因を踏まえて古代には大陸交易の湊みなと（港）があったとされている。

さらに奈良時代には対外交流の要かなめとして筑紫（九州）に出先の役所

「大宰府」を博多湾から南へ約16キロ離れた地（今の太宰府市）に

置かれると、大宰府の組織の一環として近隣の国々の外交使節などを

もてなす迎賓館「筑紫館（後の「鴻臚館」）こうろかん」が交易の中心となり、

現・福岡市中央区西公園付近にあったとみられる「荒津の湊みなと（港）」

を利用していたと推定されている。

古代、荒津湊が周辺にあったとされる今の「西公園」は福岡湾埋立

地（中央区荒津1・2丁目）の上を東西に走る福岡都市高速道路の南、

博多漁港の西方にある「荒津山（荒戸山とも呼ぶ）標高48.7m」

を中心として明治時代に整備された公園である。この荒津山はかつて

は博多湾に突き出していた。その突出した埼が「荒津の岬」であり、

付近の海面を「荒津の海」海岸を「荒津の浜」ともいわれ、また「続

風土記」には「・・・荒津（戸）山の下は、大船多く泊りける程の深

き海なりし・・・」とあり、このことからこの辺りに古代の津（港）

「荒津」があつたことが想定されている。

また、「続風土記」などには古代の博多湾は現在の西公園（荒津山）の南麓の中央区荒戸（1，2，3丁目）から南へ約1キロ離れた地にあり、今、市民の憩いの場となっている「大濠公園」まで湾入おおほりこうえんしていただとされ、この大濠公園の地を「草香江」とも称されたとされている。

・今の「荒戸」の地名は古代の湊（港）名「荒津」から転じたものと説がある。また「草加江」の名は今も大濠公園の南に町名として残っている。

・古代、博多湾の入江であつたという大濠公園の東隣接地にある国指定史跡「福岡城跡」の一角にあつた平和台球場跡から古代、外交使節などをもてなした迎賓館「鴻臚館（筑紫館）」の遺跡の一部が確認され、現在も発掘調査が続いている。

古代の「荒津」はこの筑紫館（鴻臚館）に付属する津（港）であつたと推定されている。

◎今、古代の「荒津の岬（崎）」に想定される「西公園」に上り公園の先端付近にある展望台から前方を見ると海岸線は埋め立てで遠のいたといえ、北側には博多湾を隔てて、万葉集にも詠われている「志賀しかの島」が正面に浮び、また、左手の西側には「能古島のこ」が見えるなど、

まだまだ福岡湾周辺に残こる万葉的風光を眺望することができる。

(写生地) また、右手、東側には福岡市近郊の山で九州百名山の一つに数えられ、登山の山として市民に親しまれ、また古代の海路での目標の山であつたろうと思われる「立花山」などの山並とその麓に広がる市街地と足下には博多湾(古代の「荒津の海」)の埋立地に建てられた石油センター、倉庫群と博多港の一部を描く(杏花)



・万葉集には、「荒津」「荒津の浜」の名で詠じたつぎの問答歌がある。

しろたえ

そで

かた

① 白妙の 袖の別れを 難みして

荒津の浜に 宿りするかも

卷十二―3215

作者 未詳

(解説) あなたとこのままははなればなれになることが惜しいので、

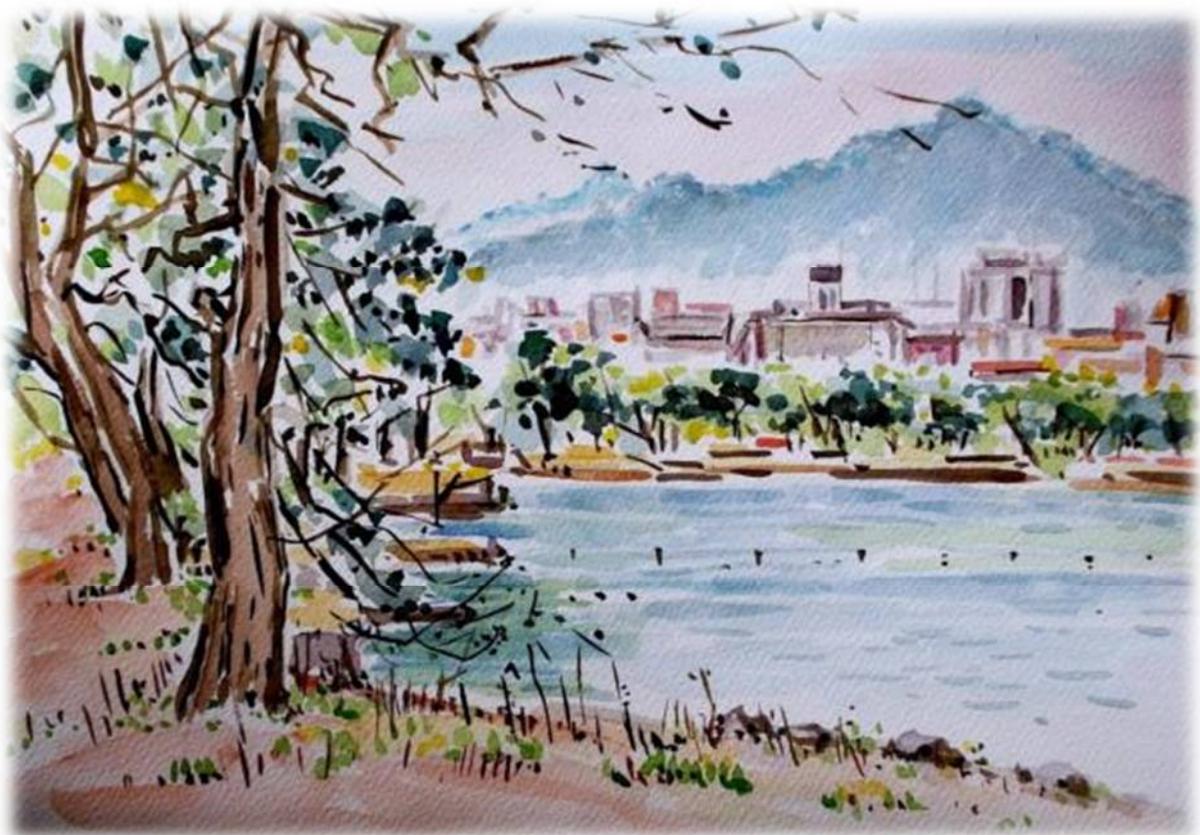
荒津の浜で一夜の宿をとってしまった。の意。

●次の歌との2首の問答歌は都に帰ろうとするか、あるいは唐や新羅へ派遣される官人が、送ってきた人と荒津の浜で別れを惜しんだ心情を詠んだものであろう。

(写生地) この万葉歌に詠われている「荒津の浜」は、博多湾の海岸線が今よりもずっと陸地に入り込んでいた古代、筑紫館の下の船着場あたりの浜辺を指し。との説がある。筑紫館跡として発掘中の平和台球場跡地の西横地近辺にあり博多湾の入江であった地といわれる大濠公園を描く。なお、この歌の歌碑が公園内に建っている。

(杏花)

「大濠公園」(昭和4年に全国有数の水景公園として開園)



②草枕 旅行く君を 荒津まで 送

りそ来ぬる あき足らねこそ

(解説) 旅に行くあなたを、荒津までお送りして来ました。もっとお逢いしていたいと思うものですから。

(写生地) 周辺に古代の津(港)「荒津」があつた地と想定される福岡市中央区荒戸(2, 3丁目)から荒津の崎(西公園)への上り道を描く。

(杏花)



(参考文献)

・「福岡県の地名」日本歴史地名大系・福田良輔著「九州の万葉」等

・梅林孝雄著「万葉歌碑見て歩き」・日本古典文学大系「万葉集三」等

「位置図」

